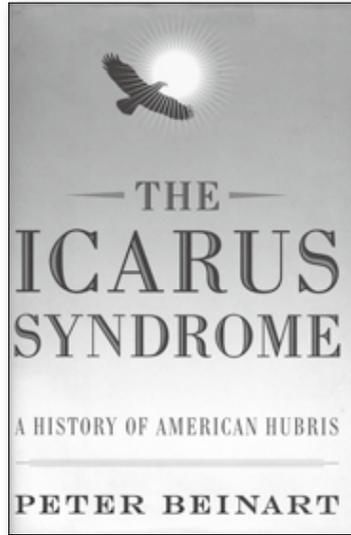


選評

東京大学先端科学技術研究センター准教授

池内恵

# リベラルたちの「改心」、あるいは アメリカ外交史のフロイト的解釈



Peter Beinart, *The Icarus Syndrome: A History of American Hubris*, New York, HarperCollins, 2010.6, 496P

オバマ政権の外交政策を支える理念はどのようなものか。これを考えるために、ピーター・バイナートの『イカロス・シンドローム』は有益な手掛かりとなる。本書は、民主党系

の著名な若手論客が、オバマ世代の外交政策を根拠づける、歴史観と倫理観を提示しようとしたものといえよう。

1971年生まれのバイナートは、

1993年にエール大学を卒業後、ローズ奨学生としてオクスフォード大学で学び修士号を取得。1995年からニューリパブリック誌の編集に携わり、1999年から2006年には編集長を務めた。外交問題評議会のフェローを経て、現在はニューヨーク市立大学のジャーナリズム大学院で准教授として教鞭をとりつつ、ワシントンのニュー・アメリカ財団でフェローも兼ねる。著者の華麗な経歴に屈折を加えているのが、積極的な対外介入政策を支持し、特にイラク戦争を支持した

リベラル派、いわゆる「リベラル・ホーク」の急先鋒だったことだろう。「イラク開戦支持」はリベラル派知識人にとってトラウマとなった。反ブッシュ・反共和党の論陣を張れば、多くの論点が自らに跳ね返ってきた。なぜリベラル派はイラク戦争において独自の視点を持ち得なかったのか？ この問いに応えるために、著者は20世紀を通じた米外交政策の思想史を遡っていく。

冒頭の、まるで映画の一場面のようなエピソードが、全体のストーリーの「樫」となっている。ここで提示されるのが、「父殺し」のモチーフである。2006年初め、ニューヨークのアップアイースト・サイドのカフェで、バイナートは長年「崇拜」の対象にしてきた歴史家・知識

人アーサー・シュレジンジャーと同席している。この思想的「父」は、不意に困惑させる問いを投げかける。「なぜ君の世代は戦争を支持したのか？」

バイナートは言葉に詰まってしまふ。答えられないまま、翌年、シュレジンジャーは亡くなる。ある日バイナートに、不意にこの問いへの答えが思い当たる。そして亡きシュレジンジャーに向けて叫ぶのである。

「その理由は、犯人は…あなたもその一人じゃないですか！」

なぜシュレジンジャーが若い世代に戦争を支持させた「犯人」なのか。もちろんバイナートはシュレジンジャーの好戦性を批判しているのではない。その逆である。シュレジンジャーとその世代が、事あるごとに

「ヴェトナムの再来」を警告し続けたにもかかわらず、1990年代のアメリカは対外介入に成功し続けた。リベラル知識人の反戦論が、「狼少年」のようにみなされ、若い世代から耳を貸されなくなった時に、アメリカはイラク戦争に向かった。

21世紀の初頭に、なぜシュレジンジャーのような往年のリベラル派知識人が、著者のような崇拜者からも信頼を失っていたのだろうか。そして、著者たちの世代はなぜ、アメリカの対外政策において「物事がうまくいかないということ」を、想像できなくなっていたのか。著者はその経緯を歴史を紐解いて探っていく。

現代アメリカ外交の悲劇を描くために用いられるメタファーが、古代のギリシアの悲劇と神話である。ア

イスキュロスの『ペルシア人』では、若き王クセルクセスが、偉大な父ダリウスから受け継いだ帝国を守るのに飽き足らず、父の果たせなかった

ギリシア征服を試みて敗れる。オウディウス『転身物語』でイカロスは、父ダイダロスが作った羽で舞い上がり、「高く飛び過ぎてはいけない」という父の教えに背き、太陽に近づきすぎて墜落する。

これらの悲劇や神話を引いて著者が示そうとするのは、歴史における「世代」の問題である。あらゆる世代は、先行する世代の遺産を受け継ぐ。しかしただ単に引き継ぐのではない。前の世代を乗り越えようと格闘する。そこに失墜が待ち受けている。また、たとえあらがっていても、前世代から否応なく多くを受け継いでいる。

「以前の世代の成功から、傲慢を受け継ぐ」のである。

本書は、近現代のアメリカ外交を、「父殺し」と「傲慢」の織りなす神話的な悲劇（時には喜劇）として描く。歴代のアメリカ大統領と、その周辺で外交政策を練り上げた知識人たちが、どのような生い立ちから、何を乗り越えるべき「父なるもの」としていたのか。何を受け継ぎ、どのような「傲慢」の種を播いたのか。

著者は20世紀のアメリカ外交史を三つの段階で「傲慢」が上昇し悲劇をもたらすサイクルとして描く。第一の段階は第一次世界大戦時のウィルソン大統領とそのブレーンたちに端を発する。「理性」と「教育」による人類の進歩を信じ、米国の参戦を国民に訴えた「戦時急進主義者」た

ちは、戦後の講和外交の不合理と、米議会の国際連盟条約の批准否決に失望し、現実主義に傾斜していく。

「理性の傲慢」の失墜は、第二段階の「強さ (toughness)」に囚われた、別の形の傲慢を上昇させる。「ミュンヘンの宥和」の失敗は決定的であり、悪を善に変えることはなく、封じ込めるしかないという冷戦思考が強固に定着する。

米外交の「強さ」への欲求は、「父殺し」の希求と深く結びついていた。父が駐英大使として対独宥和政策を推進したケネディ大統領は、ピッグス湾事件をはじめとして力を誇示する政策をとりがちだった。政治的キャリアの乏しいまま大統領に昇格しなければならなかった。ケネディ

とジョンソンのもとに集ったシュレジンジャーをはじめとした「ベスト・アンド・ブライテスト」は、「強さ」への信奉に科学と理論の装いをこらした者たちとして描かれる。

彼らがヴェトナム戦争で挫折することで、「強さ」に囚われない外交政策を模索するようになる。それはリベラル派低迷の時代の始まりだった。

一方で新左翼のように、強さを忌避して外交政策や政治そのものから遠ざかる勢力が現れ、他方でそれを嫌い、「強さ」を取り戻そうとするネオコンサーバティブに転じる者たちが出てきた。

興味深いことに、「強さ」への強迫観念から比較的自由な外交政策を採用したとして肯定的に描かれている大統領は、アイゼンハワーとレーガ

ンであり、いずれも共和党である。第二次世界大戦の英雄であるアイゼンハワーは、強さを誇示する必要がなかった。一方、レーガンは空想と現実を取り違えるその特異な性格ゆえ、「強さ」という観念に囚われなかったと著者は見立てる。

レーガンが図らずも促進した冷戦の終結は、当初は「平和の配当」を求める世論をもたらし、「強さに囚われない」外交政策が実現する時代が到来したかに見えた。しかし湾岸戦争から、ボスニア・ヘルツェゴビナやコソボへの介入といった米国の対外軍事作戦が成功裏に終わるうちに、米国の全能を過信する第三の段階、いわば「支配の傲慢」が蔓延する時代となった。ここにネオコンサーバティブの次世代が成長し、「不肖の息

子」として父を超えたいと願っていたジョージ・W・ブッシュ大統領の政権で重用された。「強さの傲慢」の失敗を記憶するシュレジンジャーら旧来のリベラル派知識人の不安は時代遅れのものとされ、著者自身を含むリベラル層も時流に棹さそうとした。そこにイラク戦争の陥穽が待ち構えていた、というのが著者の描くストーリーである。

悲劇のサイクルとして描かれるにもかわらず、本書のトーンは明るい。「傲慢」に陥って地に落ちてもお、アメリカはまた飛び立ち、今度こそ高すぎもせず、低すぎもせず飛んで行ける、という信念は、オバマ大統領に託された希望そのものだろう。

(いけうちさとし)